

ごあいさつ

『わたくしたちの主張』

社会科が誕生してから十年あまり、その間社会科はいくたびも試験に当面してまいりました。再三の改訂も、ともすればそのたびごとに本来の精神を弱めていく結果を招き、子どもの切実な問題解決を中心とする学習指導は日一日と影をうすめていくようにさえみえます。これからの情勢もまた、山登以来の社会科の考えかたを堅持しようとする者にとっては、いよいよ業眼を許さぬものがあるといわなければなりません。そうした教師たちは、自分たちこそ子どもの成長を正しく守るのだと信じて、しつような抵抗にぶつかって、しだいに孤独におちいって、多くのを避けることができな

ないと思われま

と考えます。量より質の充実がなければ、社会科の初志をどこまでもつらぬいていくことは至難であるからです。その意味で、私たちはこの会の中心になって活動する人たち（A会員）を真に社会科を愛さずにはいられない人、社会科の考えかたをつらぬき育てることに自分の生きがいを見いだす人だけにかぎりたいと考えます。また、その条件をみたしているかぎり、だれに対してもよろこんで門をひらきたいと考えます。そういう人たちの間における隔意ない、しかしきびしい論争は、この会があらゆる困難にたえて着実に前進していく基盤とも活力ともなるでしょう。

一方私たちは、自分たちの研究を促進し、おたがいの固結を固めるために、またその主張を世の中に打ち出していくために、機関誌をもつことを計画しています。ただその場合もまた、主張の純粋さをこわさないために、あくまで会員制をとり、市販は避けたいと考えます。A会員として入会されないまでも、この会を育てる意味において、私たちの主張に関心を寄せられる人びとが、一人でも多く、力をかしてくださることを切にお願いしたいと思います。

会員の資格

— 会の理念・原則

- 一、注入主義をいかなる意味においても受け容れない人
- 二、いわゆる系統的内容の強調に対して疑問をもつ人
- 三、今日さかんに推進されている徳目主義的な道徳教育に賛成できない人

綱領（六三年）

わたくしたちの会は、子どもたちの切実な問題解決を核心とする学習指導によつてこそ、新しい社会を創造する力をもつ人間が育つのだという確信から生まれました。七たがって今日のようにこの確信すなわち社会科の初志がしだいに薄れようとする段階においては、この会は教師がそのような世間の流れに抗してあくまで地道な研究と実践とを確保することができるところに、たがいに結びあい励ましあう組織だということができます。

わたくしたちが注入を是とする立場を排し、いわゆる系統主義の知識教育、徳目主義の道徳教育とあくまであいれないのは、それらが人間の正しく育っていく真実にそむき、教育をゆがんだものにすると考えからです。もちろんわたくしたちの現在おかれている立場は決して安らかなものではありません。しかし、どんな権威もおそれずなつとくのかいかなものには断じて屈しない強い意志の結びつきはかならず子どもの幸福を守ると信じます。

（一九五八年二月）

（一九六三年八月）

初志の会の誕生と歩み

第一期 社会科教育の原理の追究

(第一回〜第四回集会 一九五八〜一九六一年頃)

一九五八年、長坂端午、重松鷹泰、上田薫、大野連太郎(文部省で社会科を誕生させたメンバー)のよびかけで生まれる。会の発足にさきがけて五八年七月、『わたくしたちの主張』を有志に配付。五八年八月九日から三日間、伊豆熱川温泉で創立総会をかねた第一回集会。テーマは「注入主義について」。初代運営委員長、長坂端午。事務局、長坂端午宅(会の事務、及び会誌編集の事務的な仕事を長坂輝子夫人が担当)。一〇月一日、新しい指導要領が告示。指導要領は「試案」から「国家基準」へ、また、系統的知識の注入の傾向を強化。五八年一月、『考える子ども』創刊。編集責任者、長坂端午、上田薫。年六回発行。表紙絵、長谷川雅也。「会員の資格」(会の理念・原則)「綱領」として位置づけられていた)を掲載。会員になるには、それぞれに該当することの他に「①会員二名以上の推薦により本部の承認を受ける、②直接長坂、重松、上田、大野のうちのどれかの推薦を受ける。その際、手紙による場合は、自分の考えかたを詳細に説明することが必要である」という規定があった。誌上では、とくに歴史教育の問題が集中的に取り上げられる。会では社会科教育の基本的なあり方を検討し、とくに歴史教育や道徳教育の分野における注入主義や系統主義を批判。目標・方法・内容の統一の原理に立つ社会科学習を追究。第四回全国集会から授業記録にもとづく分析が始まる。

第二期 教材研究・評価・指導計画の検討

(第五回〜第九回集会 一九六二年〜一九六六年)

第六回集会(六三年)で研究部、組織部、編集部、出版部の四部門が作られる。六三年八月、「綱領」が総会決定。先の「会員の資格」に代わって三二号(六三年九月)より「考える子ども」の末尾に記される。会誌編集責任者、二八号(六三年三月)より瀧美利夫(二四八号、九八年一月まで)。表紙字、三二号(六三年一月)より長岡文雄。表紙絵、三七号(六四年八月)より袖垣治彦。誌上には、現場の教師からの授業実践の記録やその検討が多く掲載。六二年、教科研事務局長・大槻健「教育」八月号「社会科教育における経験・態度―人格主義について」において、初志の会を文部省と同じ「経験主義」だと批判。病中の長坂にかわって「教育」一〇、一一月号で、上田が反論。この頃、重松鷹泰「授業分析の方法」五八年や、重松・上田・八田編「授業分析の理論と実際(正・続)」六三年が刊行。六五年、本会最初の著書「子どもの思考と社会科指導」

第三期 問題解決学習と子どもの成長過程の究明

(第一〇回〜第一五回 一九六七年〜一九七二年頃)

六七年、第一〇回集会、高尾(東京都八王子市)の薬王院にて開催。この集を機に、これまでの少数精鋭主義を改め、会員・誌友以外にも集に自由に参加可能に。集会で初めて問題解決学習がテーマになる(目標のあり方と問題解決学習)。この時期は、問題解決学習における子どもの問題の成立・発展、教材の構成、さらには教育的系統の成立、といった多くの課題を追究。六七年八月、事務局、野尻智宅へ。会誌、表

紙絵、六七号(六九年九月)より上田徹。会の著書、

『評価を生かす社会科指導』(六七年)、『問題解決学習の展開』(七〇年)が刊行。後者は問題解決学習という言葉に冠した、初志の会一〇年の集大成。上田、『考える子ども』の六三三号(六九年一月)で、安東小学校のカルテを紹介し、その方法を説明。八五号・八六号(七二年九月、一〇月)にも系統・カルテ・数個という論文を寄稿。七二年八月、長坂端午が健康上の理由から運営委員長を退き、運営委員長、上田薫、名誉運営委員長、長坂端午。

第四期 社会科における人間回復の探求

(第一六回〜第二五回 一九七三年〜一九八二年)

七三年頃から地方ごとのブロックでの研究活動が活発に。関東、信越、東海、関西、西部の各ブロックで地方研究会が開催。関西ブロックでは「生きぬく子ども」(九七年まで一三三号)、関東ブロック「青年と社会科教育研究」を刊行。七四年、初志の会の長年の実践の蓄積を踏まえて、『社会科の初志をつらぬく会の授業記録選―第一集』出版。この後、第五集まで。七六年の第一九回集会より、中学校の分科会が開催。会誌表紙絵、一〇九号(七六年九月)より酒井貢。この時期、社会科の授業を人間回復の過程という観点からとらえ、価値の多元化の中で、個の多様さを保障し促進するための指導、教材等のあり方を検討。

第五期 個としての子どもの深い理解

(第二六回〜第三四回 一九八三年〜一九九一年頃)

八三年、事務局、赤池憲雄宅へ。八三年、楽しい社会科への手引きとして『社会科に魅力と迫力』を刊行。

初志の会編・刊行物

初志の会の課題と方向について議論が重ねられ、八七年、第三〇回集会において「個を育てる教師のつどい」という別称を採用することに。それと関連して、八八年には、第三一回集会から問題別懇談会で社会科以外の教科が検討。八七年、初志の会の三〇年の理論と実践をまとめた『問題解決学習の社会科学学習』刊行。

八八年、個を育てる指導を具体的に研究し、そのポイントを示した『個を育てる社会科指導』を刊行。八九年、運営委員長、日比裕、会長、上田薫。八九年から『シリーズ 個を育てる(全一〇巻)』を順次、刊行。この時期子どもを奥深くとらえ、それに丁寧に対応することが課題に。カルテによる子ども理解のあり方が特に検討された。低学年社会科の廃止、高校での社会科の分割など、社会科解体への動きがあらわれ、初志の会は「社会科の改変についての反対声明」を決議(八六年九月『考える子ども』一六九号に掲載)。

第六期 個が育つ問題解決学習の探究

(第三五回〜現在 一九九二年〜現在)

九二年、運営委員長、市川博。事務局、藤本万里子。英美宅。会誌・編集責任者、的場正美、二四九号(九八年一月)より。九八年八月、「綱領」改訂を総会決定。会誌、二四八号(九八年九月)より掲載。この時期、ある意味で文部省の考えが初志の会に接近。その後、二〇〇〇年以降、「学力低下」という議論により、世の中の風潮は系統主義へと急旋回。二〇〇四年八月、運営委員長、的場正美、会長、市川博、名誉会長、上田薫。会誌編集責任者、島本恭介、二九二号(二〇〇五年一月)より。

『子どもの思考と社会科指導』(明治図書、一九六五)

『評価を生かす社会科指導』(明治図書、一九六七)

『問題解決学習の展開』(明治図書、一九七〇)

『社会科の初志をつらぬく会 授業記録選第一集』(明治図書、一九七四)

『社会科の初志をつらぬく会 授業記録選第二集』(明治図書、一九七六)

『社会科の初志をつらぬく会 授業記録選第三集』(明治図書、一九七九)

『社会科の初志をつらぬく会 授業記録選第四集』(明治図書、一九八二)

『社会科の初志をつらぬく会 授業記録選第五集』(明治図書、一九八二)

『社会科の魅力と迫力を一楽しい学習への手引き』(明治図書、一九八三)

『問題解決学習の社会科授業―初志の会30年の理論と実践―』(明治図書、一九八七)

『個を育てる社会科指導』(黎明書房、一九八八)

シリーズ・個を育てる(全十巻)

① 星野恵美子『社会科を好きにするには―指導の「コツ」』(黎明書房、一九八九)

② 小酒井厚子・大坪弘典『座席表授業案の活力―安東小学校における実践―』(黎明書房、一九九二)

③ 築地久子『生きる力をつける授業―カルテは教師の授業を変える―』(黎明書房、一九九二)

④ 石野明子・戸崎延子・渡辺泰子『子どもの活力を引

きたす授業の創造―社会も強く 国語も強く―』(黎明書房、一九九二)

⑤ 水戸貴志代・日野敏行・樫村謙一・佐藤園江『地域の教材はなぜ効果的か』(黎明書房、一九八九)

⑥ 清水毅四郎・市川文夫・小林秀雄『子どもを自

主的にする社会科―見学・調査の活用―』(黎明書房、一九九〇)

⑦ 戸田久雄・酒井典子『話し合いが個を育てる―安東の教育とともに―』(黎明書房、一九九二)

⑧ 松本健嗣・馬場剛・山口喜彦・野地泰次・米山和男・加藤陽一郎『追究する子どもが学ぶもの』(黎明書房、一九九〇)

⑨ 渥美利夫・野沢迪夫・渡辺美代子・渡辺富士男『低学年児の社会理解を深める』(黎明書房、一九八九)

⑩ 村瀬法子・松本和彦・溝端祥浩・若林シヅミ『本音と本音をぶつけ合おうよ―子どもと教師がともに育つ学級づくり―』(黎明書房、一九九〇)

『問題解決学習の継承と革新―21世紀社会科教育への提言―』(明治図書、一九九七)

『個を育てる教育実践の筋道―21世紀社会科教育への提言―』(明治図書、一九九七)

わたくしたちの主張 — 綱領 (九八年)

一九六五年頃 長坂端午



一九六〇年八月比叡山集会以最後の様子

一九五七年 上田 薫



一九六〇年八月比叡山集會 重松 鷹泰

年代不明 全国集會、右から上田、重松



わたくしたちの会は、日本の教育政策が系統主義の知識教育、徳目主義の道徳教育に大きく転換したことを批判し、一九五八年（昭和三十三年）に発足しました。それは、そのような教育では、その子にふさわしく個性を確立していくことが阻害されると考えたからです。一九四七年（昭和二十二年）に新設された社会科の初志は、新しい民主的な社会を主体的に創造する人間は子どもの切実な問題解決を核心とする学習によってこそ育つという考えにもとづいています。

今日、社会は激動し困難な課題に満ちています。そのような社会にあつて、社会のよりよき変化を求めて創造的に生きる力を育てようとするれば、子どもの切実な関心と強靱な意思にもとづく主体的な問題解決学習の重要性がますます大きな意義をもつに違いないと確信し、次のことをめざします。

○わたくしたちの会は、問題解決学習を進めていくことによつてこそ、子どもたちはものごとの本質をねばり強く個性的に追究し、新しい社会を創造できるように育つと考えます。

○わたくしたちの会は、つめこみ・教えこみの指導を排します。社会科だけではなく、すべての学習・生活指導で、子どもが中心となつて進める教育の創造をめざします。

○わたくしたちの会は、一人ひとりの子どもを人間として大切に、広い視野から主体的に考え、行動できる子どもにしようと努めます。

○わたくしたちの会は、社会科をはじめとして、さまざまな教科に関わる教師と、学び高めあう人間関係を築きながら、教育実践にもとづく主体的で地道な研究に邁進します。

(一九九八年八月)